

特殊学級における「総合的な学習の時間」

1 特殊学級の「総合的な学習の時間」

前述のように、特殊学級の教育課程は、原則的には小・中学校の学習指導要領に基づいて編成されます。また、特に必要がある場合は、特殊教育諸学校の学習指導要領も参考にして、特別の教育課程を編成することができます。こうした点から考えると、基本的には「総合的な学習の時間」は、各小・中学校の学習指導要領に示されているのと同様の授業時数を設定し、実施することが望ましいといえます。

2 生活単元学習と「総合的な学習の時間」

生活上の様々な課題を成就するために、一連の学習活動に取り組む過程が、生活単元学習の過程であり、その過程をよりよく展開するための教師の対応が、生活単元学習の指導です。そして、生活単元学習で児童生徒が取り組む学習活動には、生活、国語、算数などの各教科と道徳、特別活動、自立活動の各領域の内容が含まれます。しかし、その学習活動は、いろいろな領域や教科の内容を習得するための活動ではなく、あくまでも生活上の課題を達成するための活動です。そういったねらいのもと、種々の活動に取り組んでいく過程で、結果的に様々な領域や教科の内容が習得されていくのです。

一方、「総合的な学習の時間」は、一つには各学校が地域や学校の実態等に応じて創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開することと、もう一つには21世紀の社会の変化に主体的に対応できる資質や能力の育成を志向した、教科等の枠組みを越えた横断的・総合的な学習の円滑の実施という大きな二つのねらいのもと、「生きる力」の育成を目指して行われる学習活動です。生活により密着した指導を行い、将来の社会に生きて働く力の基礎を培っていくという点においては、両者に類似した部分は多く含まれますが、それぞれのねらいとする点やその学習の設定の背景に違いがあると考えられます。

このようにして考えてみると、生活単元学習と「総合的な学習の時間」は、それぞれ独立した学習として教育課程に位置付けていくのが妥当であると思われる。

3 特殊学級の「総合的な学習の時間」の展開

特殊学級における「総合的な学習の時間」の展開の仕方には、次のような5通りの方法が考えられます。

特殊学級独自で実施する方法

通常の学級のいずれかの学年に参加して実施する方法

交流している通常の学級で学習する方法

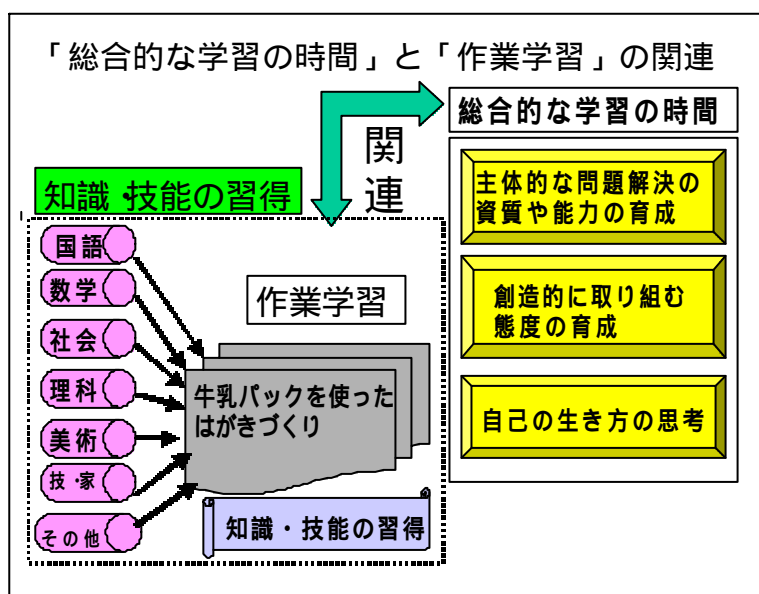
学校全体で学習する方法

他の小・中学校の特殊学級で実施する方法

いずれの場合にしても、自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動、交流活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れることが必要となってきます。そうした中で、生活単元学習や作業学習と関連させ、各教科、各領域で培われた知識や技能を基に、主体的に問題解決に向けて取り組む姿勢や能力、創造的に取り組む態度を育て上げ、児童生徒一人一人が生き方について考えていけるような学習にしていく必要があります。

「総合的な学習の時間」を充実した時間にしていくためには、グループ学習や異年齢集団による学習など多様な学習形態を取り入れたり、地域の人々の協力も得ながら全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制を工夫したりすることが大切です。また、地域の自然や産業、公共施設、文化遺産などの教材や学習環境を積極的に活用し、学習に生かしていけるように工夫することも必要です。

そして、一人一人の児童生徒の興味・関心に基づいた課題や地域や学校の特色に応じた課題などの設定に努め、楽しく、生き生きと学習活動に取り組めるようにしていきたいものです。



4 「総合的な学習の時間」小学校指導事例

「うみのおもいでづくり」

1 設定の理由

潮干狩りを通して、海の生き物に触れたり、水遊びをしたりするなど、児童の興味・関心に基づく豊かな活動や体験ができる。

目的地までの公共交通機関の利用方法など児童の切実感や必要性を喚起して、自ら課題発見したりその解決をしたりする主体的な活動が設定できる。

算数や生活単元学習等で身に付けた知識や技能、資質や能力を相互に関連付けて総合化し、生活の場に生かすことができる。

2 ねらい

- ・ 潮干狩りを通して、海の様子を調べたり、そこに住む生き物に触れたりする体験を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考える力を育てる。
- ・ 公共交通機関の利用などを通して、道徳的な判断力、意欲・態度などを実践的に身に付ける。
- ・ 目的地までの行き方や、海辺の生き物などについて、自分なりの学び方やものの考え方を身に付け、問題解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育てる。
- ・ お金の学習や切符の買い方など算数や生活単元学習で身に付けた知識や技能を相互に関連付け総合的に働くようにする。

3 指導計画（26時間完了）

指 導 過 程	主 な 学 習 内 容
1 海へ行ってみよう（1時間）	潮干狩りや砂遊びなどの経験を発表するなどして、海への思いを膨らませる。
2 行き先や行き方を調べよう（2時間）	地図や電車の路線図などを使って、自分なりの方法で目的地やそこまでの交通手段について調べる。どの公共交通機関の利用が便利か発表する。
3 運賃はいくら？（2時間）	目的地までの運賃を調べる。往復の運賃を計算したり、10円・100円硬貨で運賃を出したりする。
4 電車の乗り方（2時間）	駅の様子のビデオを見て、電車に乗るまでの手順などを調べ、発表する。（自動券売機での切符の買い方、何番ホームで何行きか電車で乗るか、どこの駅で降りるかなど） 電車の利用のマナーについて話し合う。
5 昼食とおやつ（1時間）	当日の昼食とおやつはどうするかを話し合う。（お弁当におにぎりを作ることを、おやつは200円までにすることを確認する。）
6 海辺の生き物を調べよう（4時間）	潮干狩りで採るあさりや、磯にいる生き物について、図鑑やビデオなどで調べ、カードに絵や文でまとめる。
7 おやつを購入（2時間）	潮干狩りに持っていくおやつを選んで買う。
8 潮干狩り（6時間）	潮干狩りに行く。（当日）
9 思い出の作文や絵（2時間）	潮干狩りに行って、楽しかったことを作文や絵に表す。
10 貝殻を使った工作（4時間）	採取した貝殻や紙粘土を使って、海の生き物の工作をする。

4 指導の実際

< 行き先や行き方を調べよう >

簡略化した絵地図や路線図を使って、目的地の海岸や最寄りの駅などを調べた。電車の好きな児童は、駅名の読み方や、乗り継ぎの駅などを発表した。いろいろな方法で、行き先や行き方を調べ、絵地図にした。

通常の地図や路線図では、児童が読み取ることは難しいので、それらを簡略化した地図や路線図を用意した。地図は白地図を拡大し、児童が目的地を記入したり電車の写真や魚貝のカットなどを工夫しながらはって絵地図にし、教室に掲示した。また、電車の好きな児童が活躍する場面を作るなど、個性を生かしながら学習を展開した。

< 運賃はいくら？ >

潮干狩りに行くためには、電車を利用するので運賃がかかるという切実感を喚起させ、目的地までの運賃を電話で聞いたり、時刻表で調べたりするなどの方法を考えた。また、自動券売機で切符を買う必要性から、自分なりの方法で運賃を出す学習をしたり往復の運賃を計算したりした。

運賃を出す学習では、本物の10円・100円硬貨を使って、臨場感をもたせた。児童の実態に応じて、金種が分かること、十ずつ、又は百ずつ増加することを学習した。ここでは、十円玉で、10円、20円、30円...と順に額を増やしていきながら100円まで数えたり、お金を一、十、百の位が書いてある紙の上に出したり、百円と十円を組み合わせ、110円、120円、130円...が出せるように支援した。

金銭の学習は社会生活に直結するので、段階的に算数や生活単元学習の年間計画の中に位置付けている。「買い物」や「お店屋さん」などの学習で身に付けた知識・技能を生かしながら学習を進めた。また、お金は財布に入れて保管することや大事に扱うことを確認しながら学習を進めた。

また、学校だけの学習に終わらず、家庭にも協力をお願いして、買い物に行ったときに児童にお金を払う様子を観察させたり、実際に払わせたりしてもらうようにした。

< 電車の乗り方 >

まず、電車に乗る駅の様子をビデオで見せた。ビデオは電車に乗る際の順路に沿って編集し、駅の全景から路線図、自動券売機、時刻表、改札口、プラットホームなどの様子を見せた。その後、どんな物があったか発表し、それを順番に並び替えて、電車に乗る手順を考えたり確認したりした。

次に、自動券売機の模型（段ボールで製作）を使って、切符が正しく買えるように支援した。降車する駅名と料金を路線図で確認して、財布（透明の小型ビニールケース）から硬貨を出して切符を買う練習をした。

そして、この学習のまとめとして電車ごっこをした。机やいすなどを使って模擬駅を作り、運転士には帽子、車掌には笛を持たせて、雰囲気を出した。また、BGMに「でんしゃごっこ」の歌を流し、それに合わせて教室内を周回した。そのときに、プラットホームでは並んで待つことや、降りる人が全部降りてから乗ることなどの公衆道徳を自分なりに考えさせた。

ビデオやデジタルカメラなどの視聴覚教材を活用して、当日の活動に見通しをもたせた。また、自動券売機の模型や、電車ごっこの帽子、笛などの小物は雰囲気を出すには有効であった。電車ごっこのときも、音楽を流すことで、単調にならずに児童が楽しんで活動に取り組むことができた。

< 潮干狩り当日 >

目的地に到着してから少し早めの昼食をとり、着替えをした児童から磯へ下りた。アサリは砂の中にもぐっているので児童ではなかなか採れなかったが、自分たちで考えてきた方法で一生懸命に潮干狩りを行った。また、磯部のカニや小さな魚を見付けたり、水遊びしたりすることに夢中になっていた。

アサリを採ることが難しい児童も、きれいな貝殻を拾ったり、砂山を作ったりして楽しく過ごすという自分の目的に沿った活動を楽しむことができた。楽しい時間はあっという間に過ぎ、帰る予定の時刻になった。児童一人一人が楽しかった思い出を胸に帰路に着いた。

一番の成果は、海そのものを体験できたことであろう。磯の香り、波の音、海水の味、磯の生き物、遠くに見える船など、児童は五感でたっぷり感じるできたと思う。こうした児童の興味・関心に基づく体験の積み重ねが、豊かな心をはぐくむのであろう。

また、この潮干狩りを通して、目的地までの公共交通機関の利用方法や運賃の計算などの課題を一つ一つ解決していく過程で、情報の集め方、調べ方などの学び方やものの考え方を身に付け、問題解決に向けての主体的な態度を育成することができたと考える。ここでは、児童が自ら課題解決できるように、個々の実態に応じて教材等を準備したり、児童が自ら選択・判断できるように情報を提供したりするなど、児童一人一人の興味・関心、思いや願いを大切に、その活動を暖かく支援していくことが重要である。このように「総合的な学習の時間」のねらいを踏まえると、教師は今まで以上に、児童の活動を支援し調整する役割が求められる。

5 「総合的な学習の時間」中学校指導事例

「交流会・地域の民話をつくろう」

1 設定の理由

生徒の住んでる地域教材を取り上げることにより、主体的に課題を発見し、よりよく問題解決する資質や能力を養うことができる。

地域と結び付いた自己の生き方を自覚し、学び方やものの考え方を追究し、生きる力を身に付けることができる。

交流活動を通して一人一人の個性を生かすとともに、社会参加への力を付けることができる。

2 ねらい

- ・ 様々な問題から自分の興味・関心を基にして適切なテーマを見いだす。
- ・ 情報や資料を主体的に収集・選択し表現方法を工夫する。
- ・ 人と人とかかわりの中で粘り強くテーマを追究する。
- ・ 既習事項を基に自分のできることについて考え、実践する。
- ・ 地域社会の一員として互いに相手を尊重し交流を深める。

3 指導計画

めあて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域教材の発掘（地域に昔から伝わる民話の取材をする） ・ 地域の人々と多く触れ合い、地域の民話を作る。 ・ 校内で通常の学級との交流会を開き相互理解を深める。 			
1 指導計画	地域の民話を調べる。 ----- 5時間 インタビューし資料をまとめる。 ----- 4時間 交流会企画 テーマ：友達の輪を広げよう ----- 5時間 民話をまとめて交流会で発表する。 ----- 2時間 地域の人とのコミュニケーション ----- 3時間			
2 指導過程	単元	学習内容	指導の実際	留意点
	萩原町の民話について調べよう	<ul style="list-style-type: none"> ・ 民話を調べる方法について知る。 ・ 役割分担を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭で昔から伝わる話を聞いてくることにより知識を広げる。 ・ 自分が住んでいる地域にも民話があることを知る。 ・ どこで話を聞けばよいのか、何を調べると分かるのかを知る。 ・ 自分たちの追究の仕方を考える。 ・ 本の好きな生徒が中心となって話をまとめて、他の生徒からもアイデアを募集する。 ・ 表現指導は市のボランティアの方にも支援してもらい、アクセントや間の取り方を工夫する。 ・ 何度も練習し音楽や絵がタイミングよく動かせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 聞いてきた話を発表する。 ・ 出身地区別でペアを作る。 ・ 隣の人や親類、知人、友人などにも聞き、お年寄りや神社や寺の関係者にも働き掛ける。 ・ 児童文学を調査する。 ・ 博物館などで調べる。 ・ 市の図書館の地域コーナーで、出版物を調べる。 ・ 関係者にインタビューをする。 ・ お話の絵をかいて紙芝居を作る。 ・ 繰り返し読み取って紙芝居を作ることにより、思考力を高める。また、紙芝居をみんなの前で発表し、登場人物の気持ちを考えて、表現する。 ・ 自分たちなりの発表の仕方を工夫する。
	計画表づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 民話の資料収集 ・ インタビューをして文にまとめる。 		
	絵の内容の理解 語句、文の読み取り 絵と文字から状況をイメージ化する 身近な絵本やテレビに親しむ 絵（物や事象）の理解 文字の読み取り 本の読み聞かせを楽しむ 絵と文字により、あらすじを理解する 好きな本を探して見る 紙芝居づくり			
3 指導過程	交流会について考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ 交流の内容、方法について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学期に1回、年3回実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分はどんな交流にしたいか話し合う。
	計画案づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 交流会の日程、役割分担、グループな 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒一人一人の願いや保護者の願いを計画 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関係の人々が参加できる日程の調整や交流している通常の学級の

	どを決める。	案に取り入れる。	時間割等を考慮する。
交流会の準備・オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> 場所、時間、交流をする対象について話し合う。 交流学习について説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各生徒が分担を確認して自分の活動について考え、気付いた点は話し合っ問題を解決する。 	<ul style="list-style-type: none"> 司会及び交流会の表現活動すべてについて通して話し合う。
触れ合いクッキング	<ul style="list-style-type: none"> 買い物学習をし、触れ合いクッキングの用意をする。 何をどうするか、具体的に知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画を立て、買い物をして、調理実習の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 買い物は計画書どおりにできたか、おつりや品物に間違いがないかを確認する。
案内状書き	<ul style="list-style-type: none"> 案内状を配布する。 あいさつや態度に気を付け、きちんと招待状を渡すようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 案内状を書き、交流している通常の学級の生徒や教師に礼儀正しく渡せるように練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間、場所、内容などを点検し、案内状を書き、家庭や近所の人々にも説明して渡せるようにする。
交流会をする	<ul style="list-style-type: none"> 交流会のねらいを踏まえて、司会や紙芝居係、ゲーム係などの役割分担をして、楽しく交流会をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 事前の計画や練習に基づいて、各自が自分の役割を意識し、自信をもって、楽しく参加できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 会場の配置や会の流れ、小学生との接し方について、臨機応変に対応する。 不備な点はお互いに直し合っできるように全員で協力する。
交流会の反省	<ul style="list-style-type: none"> 交流学习の反省会を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の人々の生き方に触れることができたか話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 各自が分担した役割をきちんと果たせたか反省する。

4 指導の実際

生徒は実際の聞き取りが断片的になってしまったり、想像やイメージで民話を書いてしまうことも少なくない。調べたり聞いたりしたことをグループ学習で話し合い、互いのよい点を生かして一つの作品にまとめさせることが大切である。また、生徒が各自収集した民話を選択処理し、一つの話にまとめるので、国語科や社会科の基礎的能力が必要である。したがって、普段からの教科別の指導との関連を十分に図っていききたい。

実際の交流会のときには、自分たちの考えたとおりに進まなかったり、みんなが思ったように動いてくれなかったりすることがあるものと考えられる。そのようなときこそ、まさに「生きる力」を培っていくことができる場であり、自ら行動できる力、考えをまとめ協力する力、直面したことがらを判断する力が総合的に生かされていく場であると考えられる。できるだけ子供たちの自主的な活動を重視し、教師は待つ姿勢を大切に指導に当たりたい。

5 評価

「生徒が自己の生き方を自覚できたか」という点では、自分の地域を知る活動を通して歴史や文化、郷土の先人の活躍を見直し、よさに気付くことができ、自らが課題意識をもって取り組む中で、生き方の変化が見られるようになった。

また、「直接体験が中心になっているか」という点では、能力差はあるが活動の中心となってよく働くことができた生徒ばかりである。消極的な生徒はペアを組むことにより興味・関心が増し、基礎的な学習の力が付いてきたと考えられる。

さらに、この学習を通して協力的な保護者が増え、特殊学級に対する理解の輪が一層広がったものと推察できる。

6 まとめ

「総合的な学習の時間」のテーマ設定においては、地域の特色、学校行事との関連、社会問題等さまざまな条件がある。教科の枠を超え、各学校の特色や生徒の実態に応じてめあてを決め、障害があっても取り組めるような学び方を工夫させたり、もの考える独自のアイデアを出させたい。また、生徒が相談し、話し合い、選択できる体験活動の場を作り、学ぶ力を身に付け、自己決定し、それが自分の生活に生かせるようにしたい。少人数のクラスでは、ぜひとも多くの人とかかわり、主体的に生きる力を身に付けさせていきたい。

交流会に参加して（通常の学級の生徒の感想）

紙芝居は絵があって話の展開がとてもよく分かった。木曾川や尾張弁など本当にあるものが出てきてよかった。
（1年A君）

少人数でも協力してすばらしい紙芝居ができた。一緒に「エーデルワイス」を歌って心が通じ合った気がしました。これからもいろいろ体験していきたいです。
（2年Bさん）

特殊学級（知的障害）教育課程案

聴

目次

次

愛知県教育センター

